

# 新潟西部地域 「新之助」生育情報 No.8

令和 7年 8月 26日  
巻農業普及指導センター

- 出穂期25日後まで飽水状態を維持
- 飽水管理の期間以降も高温・晴天が続く場合、暗渠開栓を遅らせる
- 5月中旬移植の出穂期は8月10～12日頃で、収穫開始適期は9月20日頃(積算温度1,000～1,050℃)の見込み
- 籾黄化率85～90%を必ず確認し、適期に収穫する

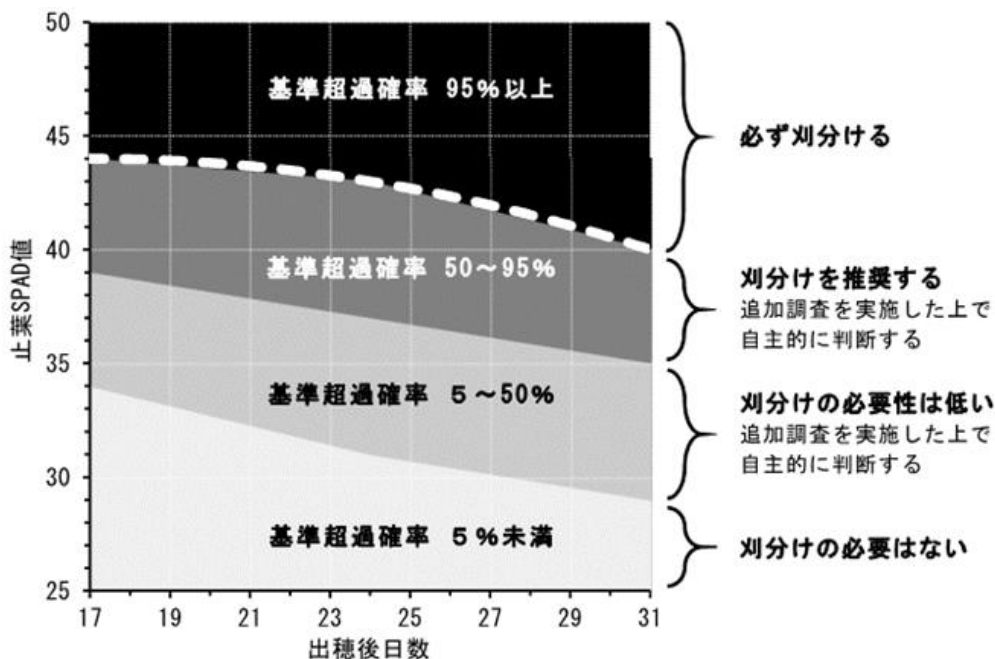
## 【今後の管理ポイント】

### (1) ほ場管理等

- 用水の確保が可能な限り、フェーン・異常高温が予想される場合は速やかに湛水し、等級低下を防ぐ。
- 出穂期25日後まで土壌の飽水状態を保つ。通水が早く終了するなど、出穂期25日後までのかん水が困難な場合は、通水最終日に十分かん水する。
- 飽水管理終了後も高温・晴天の続く場合は、水尻や暗渠栓の開放を可能な限り遅くして土壌水分の保持に努める。
- 葉色が濃く、玄米タンパク質含有率基準超過が懸念されるほ場は、下図を参考に必要に応じて他のほ場と区別して乾燥、調製を行う。

### <玄米タンパク質含有率基準超過の判断めやす>

出穂後17～31日の任意の時期の止葉葉色（SPAD値）から、玄米タンパク質含有率が6.3%を超過する確率を予測できるため、図1をめやすとして刈り分けを判断し、「食味・品質基準」超過米の混入を防ぐ。



※基準超過確率50～95%の場合は、出穂31日後頃のSPAD値で刈り分けの要否を判断する。

図1 玄米タンパク質含有率基準超過の判断めやす（作研センター：H29～R元）

## (2) 収穫

- 事前にコンバインや乾燥・調製ラインの清掃を行い、異品種混入を防ぐ。

表1 出穂期別収穫開始適期のめやす(8月26日現在) 地点:巻

出穂期	8月10日	8月12日	8月14日	8月16日	(登熟積算温度 1,000℃到達日 別表参照)
収穫期	9月18日	9月20日	9月23日	9月26日	

- 収穫開始適期は、出穂後高温で推移しているため、出穂期からの積算温度は1,000～1,050℃程度がめやす。
- 実際の収穫日は、必ず籾の黄化率(85～90%)を確認して決定する。  
茎葉や穂軸は青くても籾は成熟しているなど、栽培条件により茎葉の色は変化するので、茎葉の色だけで刈取適期を判断せず、籾黄化率を確認する。  
白未熟粒や胴割粒が増加し整粒歩合が低下する恐れがあるため、刈遅れない。
- 籾水分が22%未満になった状態で乾燥した気象に遭遇すると、胴割粒が急増する。成熟期頃の気象情報に留意し、高温。乾燥が予想された場合は新之助の刈取りを早める等を検討する。

## (3) 乾燥

- 玄米水分が低いと食味が低下し、高いほど貯蔵性が劣るため、「食味・品質基準」の水分含有率(14.0%以上、15.0%以下)となるよう仕上げる。水分が17%を切ったら、手持ちの水分計で15～20分おきにこまめに水分測定を行う(測定はサンプルを乾燥機から取り出し、数分間冷やしてから行う)。
- 胴割粒の発生を防止するため、乾燥開始時に籾水分を確認し、適正温度及び適正乾燥速度で行い、急激な乾燥は避ける(表2参照)。
- 毎時乾減水分が0.8%を超えると胴割粒の発生が多くなるので注意する。また、同じ乾燥速度でも初期水分が高いほど胴割粒が発生しやすいので、乾燥機のマニュアルに従って適正な乾燥速度になるよう設定する。
- 成熟期頃に乾燥した気象に遭遇し、籾水分が低い場合は、毎時乾燥速度を0.5%以下になるよう設定する。また、乾燥機の2段乾燥機能や休止乾燥機能を活用する。

表2 張込時籾水分と乾燥温度

張込時 籾水分	28%	24%	18%以下
乾燥温度	40℃以下	50℃以下	昼間に通風乾燥後、半日程度 貯留して夜間に加温乾燥

## (4) 調製

- 1.9mm以上のふるい目を使用し、適正流量で選別する。
- 必要に応じて色彩選別機を活用し、整粒歩合70%以上(農産物検査等級1等相当)の高品質米に仕上げる。

### 農作業事故に注意しましょう！

1. こまめな休憩・水分補給で熱中症を防ぎましょう。
2. 声をかけあって、安全確認しあいましょう。
3. 焦らず、ゆとりある作業を心がけましょう。
4. 機械の点検・清掃時、必ずエンジンを止めましょう。
5. 公道は法令遵守で走行しましょう。

